

刊行の辞

理事長 山崎 吉朗

2012年12月3日に産声をあげた一般社団法人日本外国語教育推進機構(以下JACTFL)は3年目を迎えました。研究会誌も第2号となり、3月8日には第3回のシンポジウムを上智大学で行います。グローバル＝英語となってしまう辺境的な状況の中で、JACTFLの果たす役割はさらに大きくなっています。

改めて書いて置きますが、JACTFLの定款第3条の目的には次の様に記しています。

「当法人は、あらゆる言語、教育段階の垣根を超えて外国語教育関係者が連携・協力して、多言語多文化が共生するグローバル社会に対応する多様な外国語教育を推進することを通じて、我が国における外国語教育及び外国語学習の質的向上と普及を図るとともに、21世紀を生き抜く若い世代の育成と我が国の学術振興及び諸外国との相互理解に寄与することを目的とする。」

また第4条の事業は次の7項目を掲げています。

- (1) 多様な外国語教育関係者や諸団体との連携・協力
- (2) 多様な外国語教育に関する啓蒙と提言
- (3) 多様な外国語教育に関する研究・調査・研修
- (4) 多様な外国語教育に関する環境整備
- (5) 多様な外国語教育に関する研究誌・報告書・資料等の刊行
- (6) その他当法人の目的を達成するために必要な事業

本研究会誌は、JACTFLの目的達成の為の事業の中心の一つとなっています。昨年の第1号は、講演のために3月に来日された言語学の巨人ノーム・チョムスキー教授にもお渡しすることが出来、飛行機の中で見ると(題名や要約は英語です)というメールまで頂き、感動しました。

さて、本号には、特別寄稿2本、論考8本、エッセー2本と、昨年にも増して充実した内容が掲載されています。すべての寄稿者に感謝致します。中でも昨年のシンポジ

ウムの講演者である慶應大学名誉教授鈴木孝夫先生、文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室長の圓入由美様の特別寄稿には深い感謝を申し上げます。手前味噌ですが、JACTFL の理事の中で研究会誌の目次を示した時には、まずは自分達が早く読みたいという感想が出ました。

2020 年のオリンピック開催に向けて、嵐のような教育改革が進み、中でも英語教育は、これまでの英語教育が半ば否定され、4 技能の力をつける教育に大きくシフトしようとしています。しかし、政府や議員はもとより、教育の方向性を論議する中教審ですら残念ながら英語以外の教育について発言する委員の方は皆無です。大学入試改革のパブリックコメントの中に、「達成度テストは外国語の場合、英語に限らず、現時点においてセンター試験で実施されている他言語においても、十分な配慮をしていただきたい」という意見が記されたのが、莫大な中教審の資料に掲載されている唯一の英語教育以外の記述かと思われます。そこを是正するのが JACTFL の役割です。

昨年、「簡単な道ではないが、さまざまな外国語教育関係者が手を組み、世論を作っていくことは不可能ではない。とにかく一步一步進む。この会誌第 1 号もその一步だと信じている。」と書きました。第 2 号も同様です。冒頭に掲げた目的達成のために、一步一步進んで行きたいと考えています。その一步としての第 2 号です。これですくなくとも 2 歩進みました。毎年、毎年、積み上げていきます。

最後になりますが、触れておかなければいけない嬉しいことが一つあります。昨年の会誌と異なり、賛助会員の広告が掲載されているということです。3 年目でまだ財政基盤の出来ていない JACTFL にとってたいへんありがたいことです。これはこちらが提案したのではなく、ある賛助会員からの提案があり、他の賛助会員に呼びかけたものです。この研究会誌を大きく支えて下さっています。この場を借りて御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。ご協力に心より感謝致します。

(一般財団法人日本私学教育研究所)